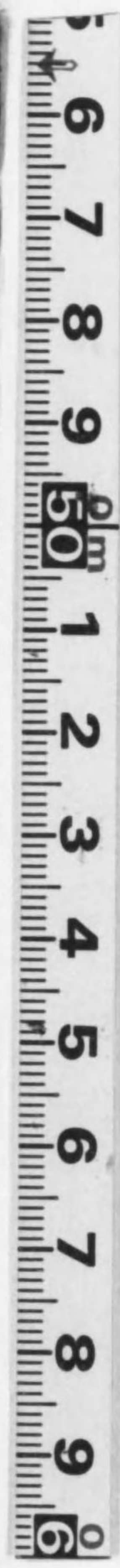


始



295

特 61

460

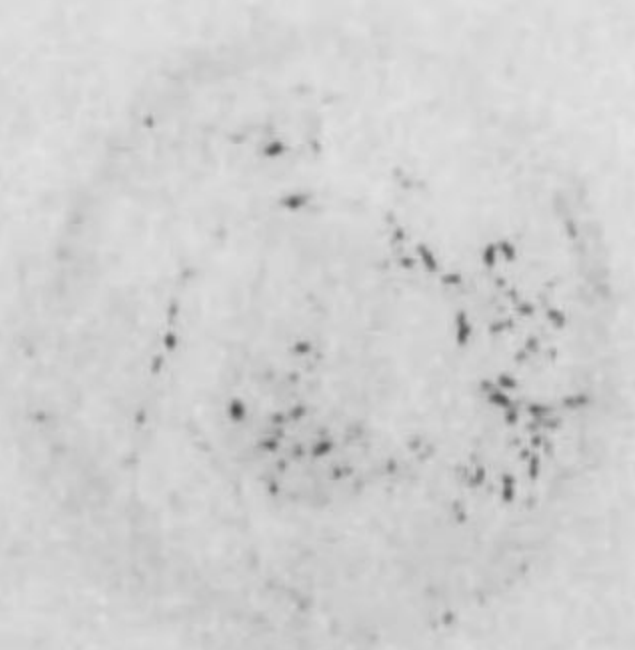
悔  
不  
餘  
行



持261  
460



物  
子  
行  
子  
行  
子





# 大用國師歌集

伊達の家に仕ふる小島某か母松の葉とてたはこ  
入汗手拭を惠けるにまつの葉といふにつけて

まつのはにつゝみかねたるかせの聲  
みみなき人にきかせてしかな



源三郎に米と酒とを謝するとて

たれこめてけふの寒さをいとふ身は  
君かなさけの深きをそしる  
をしまるるときちりてこそ世の中の  
花もはななれ人もひとなれ  
な、そちにちかよる春ははるならめ  
死出の山路の遠からねとも

—〔 2 〕—

歸一居士夏菊を贈りけるに

なつのきくかほりも秋に似たるかな  
をりて又みむにしさかのやま

嘯月尼へ

あさなあさなおとつれにけり時鳥  
あさいする身のいかてきくへき

晝寝坊にしめす

ひるねしていましめられしことのはは  
今の世までのかゝみなりけり

—〔 3 〕—



すゝしさによそのはなしはなかりけり  
ひるのあつさのものかたりして

こころありて聞はこそあれふるてらの  
かねにこたふる山ひこの音

夏の日のあつさはいかてしのふへき  
野山のくさももゆるはかりを

こそその秋かりて生せしはつすゝき  
こよひのつゆに月やとるらむ

夕立のかせに帆かけてゆくふねは  
いつくのうらにしるへあるらん

さとちかく鳴出てにけりほとときす  
やかてみ山にかへる一聲



嵐山の大悲閣にまうて

ちる花ををしむころのなかりせは  
なにかうらみん遠近のかせ

また

うちそとにもとなきものとしるならば  
こころしてきけみねのまつ風

夏日遠藤庵に遊ひて

世のちりをとほさけてすむ尼か身は  
八十路にあまるよはひならずや

また

手にむすふ清きなかれのあかの水  
わか御佛の身にもしむらん

紙帳のうた

すみなれしいほのあたりの梅の花  
ちらぬそかせのなさけなりける

我ひとりすまるかねたるいほなれは  
かせをやとひてならす風鈴



うくひすのはつねに夢をさまされて  
けさ見つけたり庭の白梅

また

鶯のけさきてなくをよくきけは  
はなはみやこにととまりにけり

東路もみやこもおなし春なれは  
今をさかりに花やさくらむ

わかなつむのへのかすみのはれまより  
向ひにみゆるふしのしらゆき  
ゆくかりはいつくのさとにかへるらむ  
かへるらんとてみおくりにけり  
はるさめのわきてそれとはふらねとも  
世にある人はよそにきくらむ



きさらきの中の十日にあらしやま  
花ははしめてほころひにけり  
をしむともいかて心のままならん  
はなもあらしにふかるるものを  
をしまるる花をさそひてふく風は  
いつくの里にやとさたむらん

よの中をいとひし人のかくれ家は  
十か七つはにしさかのやま  
數ならぬ身にもよはひのかさなりて  
こころにはつる古き稀人  
七十もすきて八十にちかけれは  
なになけくらむかりのこの身を



よしあしのむくいはいつれまぬかれし  
つひに我身のうへにそありける

むらきえのゆきのけしきに似たるかな  
木のまをもるゝ庭のつきかけ

涅槃會

けふはなしきのふはありと御ほとけの  
すかたにまよふ人そかなしき

あらし山の櫻まさに咲そめんとする時旅立するとして

おそ咲のさくらのはなよこころして  
かせにふかるな我かへりみむ

さく花のいつれちるへきものならは  
風にうらみはつけさらましを

けふもまた花にうかれておいのさか  
こえてなかむる春はつきせし



山路きてみねより谷を見おろせは  
さきにけるかな山吹のはな

大江山にて雨にあひて

大江山ふもとのあめをしのぎかね  
しはしいく野にやすらひにけり

身おいて寒さをふせくとして梅花帳を製しけるとき

梅か香にまよひしまゝにうくひすの  
わか木の下をしらて過けり

雪中に友をたつねて

吹雪するゆきに心はなきものを

またうちはらふ友とちの門

大井川みつきよけれはなくちとり

こゑきえにけり月さえにけり

かかり火をみて

かかり火にまよひし魚のあつまるは  
網うつひとの奈落なりけり



ある人きたりて隣家の婦死してまよひけるにやよなく出て  
人をなやますといふを聞ずてかたくて水施餓鬼よみける時

つみあるも罪なき人もほとけそと

しれはすなはち佛なりけり

田うゝるをみて

神代にもかはらて早苗とる影は

わかおほ君のめくみなりけり

なてしこの花を

なてしこのはなはみことに咲にけり

色香にわれもうかれぬるかな

柴の戸のしつけきまにたたくらむ

いととくひなのこゑのさやけき

二よ三よきみか菴にやとかりて

われははしめて水鶏きゝけり



涼しさにころもかたしきいぬる夜は  
ゆめもうき世をいとふなるらむ

二十六日つとめて傘の亭へのほる

むかしきく松にはあらてゆふ立を  
さけよと君かからかさのちん

暑

諸ともにあつさをさけておもひ川  
なかれに口をくちそゝきけり

おなし

今しはし雨ふらさらは世の中の  
人も草木もともにかれなむ

さよふけて後の月こそ山すみの  
衣の露にかけやとしけれ

あるとし明石の浦にて

秋ことに思ひおもひしかひありて  
こよひあかしの月を見るかな



甲戌霜月十八日夜雨をきよて

冬のよの静けきままにきく雨は  
はるの軒端のこちこそすれ

浪華にて

なにはつに船こきよせてみわたせは  
月さえわたる蘆のしたかせ

おなし

むら雲のかせにふかるるたえまより  
さえにけるかな十六夜の月

廿四日櫻井を發したつた川にて

大和路は秋こそよけれたつたかは  
よそよりはやく紅葉しにけり

玄賓の跡をとひて

とふひとのなきをたのみにかくれけむ  
おち葉にうつむ三輪の山かけ

はるかに香久山をみて

ならひたつ天のかく山うねひ山  
はるかむかひに見てとほりけり

しのたの森

うらむなよ子を思ふ身はさもあらん

妻に誠をつくすくの葉

あきふけてかはつは跡をかくしけり

ゐての玉水くむ人そうき

あたこへまうてしころ

清瀧のきよきなかれのきよきより

たたきよかれやおのかこころも

おなし

ふしをかむこころの外に法そなき

のりのほかにし心なけれは

西芳寺の楓を見て

ところく木のまにそむるもみちはの

こきはきのふはうすきなりけり

居士箕泉をおくりて

一二里はぬれてものほれ比えの山

しくれしあとの雲をしるへに



月にわかれをしみて

またみんと月にはつけよこころには  
こよひなこりの秋とこそしれ

卯月廿八日曉かた郭公をきよて

しはの戸をひらけとよもは見えわかす  
ほととぎすなくあかつきの空

残雪を見て

消のこる谷のしらゆき瀧に似て  
みつかときけはまつかせのおと

ある人のもとめによりてよみてつかはす

事ことにつきせぬ事をおもひしれ  
かきりある身に限りなきこと

鉢にうゑたる瓜をおくる人のもとへ

うゑしまゝ花よりむすふ瓜のみの  
青きは珠の姿なりけり

また

恵まるる瓜のはつなりめてたさに  
つまで心にあちはひにけり

濕瘡をうれへてよめる

きりふかき龜の尾山の濕にそみて  
うみちたらけの法の身となる

權太夫を弔ふ

此はるのわかれをなかきわかれとは  
しらてわかれしけふのわかれを

英勝寺大尼公身まかりたまふと聞て

こそ秋法の道とふ尼御前の  
いまははちすの上になります

また

南無阿彌となふる人ところとの  
外に淨土の道しなければ

なれなれし道なれはこそわすれけめ  
わすれぬ人を迷ふといふらむ

忘路亭秋暮

くす火たえかり田の跡にたつけふり  
さひしくもまたきゆる物かは



また

年をへは今もむかしとなりぬへし  
むかしにまさる人となれわれ

また

不二箱根かまくらやまの梢まで

雪はれにけりいほのあけほの

乙亥日記のうちに

さきしよりちるとはかねてしりしかと  
ふきくるかせのをしくもあるかな

丙子の春筆をこゝろみて

はつそらのけしきを筆にうつさはや  
龜の尾山にかすみたちけり

丁丑日記のうちに

めつらしや冬たにも見ぬ庭のおもに  
むつの花さく春のあけほの

庭萩

草木にもこころありけりわれ見よと  
けさ咲そむる庭の白萩

いのるかひありてふりけんけふのあめ  
民のこころのすゝしかるらむ

文政己卯の日記のうちに

初秋のつきさえわたるあまのかは  
しろきはなみのいろにそありける

霜月廿一日夜寒にいる

この冬はよほとさふさの身にしみて  
夜のいはりの數そましける

文政三年かすやの紀行の中

をちこちの野山のはなはちりはてゝ  
さつきましりに山吹のさく

おなし

はるのすゑ夏のはしめの野山こそ  
はなやみとりのむしろなりけれ

虚行實記の中よりしるす

諸大菩薩の金蓮座下に奉る



たのむそよわかゆくさきの佛達  
導きたまへ慈眼視衆生

なき母を悲みて

音つれていさめたまひしことのはの  
ふかき恵みをくみて泣けり

また

子を捨てし親のころを忘れなは  
奈落は袈裟の下にこそあれ

また

たらちねのなかきわかれの手向には  
いやつゝしまん我身ひとつを

松尾堅木原を経て老坂を踰るとき

出るより花にうかれて老のさか  
こえて見渡す春ののとけさ

天桂山文覺寺に宿りて

この寺のあるしはむかし我菴に  
法のころを尋ね來し人

長林寺行山師の三周忌辰に奉る

法の兄手つから植しさくら花  
けふ三回にをりて手向む

鹽谷覺應寺にやとりて

世のつねの人はいかてかはかるへき

海なき國の汐谷の山

また

わひしとも何かおもはんいつよりも  
心しつけきよはの春雨

丹波路にて

はるくと峰より谷を見おろせは

八重山吹のはな咲にけり

おなし

山里のしるへ尋てゆく道は

おなしなかれを三たひこえけり

松尾寺山門前の茶店にいこひ時しも咲ける櫻をみて

世をすくふ心はおなし山さくら  
ちる花もありさく花もあり



丹後の宮津を發し智恩寺海上禪窟に詣で、

來て見れはかねてきゝしにまさりけり

宮津のうらの天のはし立

大江山の麓を過ぎて

つま木こるおきなに里の名をとへは

こゝは昔の鬼のすむ山

三月十八日福智山を發す途上泥濘深く籃輿はなはたなやむ

公時も綱もこゝらてすへりけん

酒呑童子の涙雨とか

生野にて

大江山ふもとの雨をしのきかね

しはし生野にやすらひにけり

須知花岡上野氏にやとりて

春過て花岡やまを見わたせは

雲も霞もちりはてにけり

四月十日堅木原を過ぎて

昨日見し花のゆくへはいさしらす

山はみとりにまたそめにけり

西山善峰寺にて

よしあしの心たえても救ふらん  
かきりなき世にかきりなき人

應頂山勝尾寺に登りて

味方して法の軍に勝尾寺  
慈悲の利劍に向ふ敵なし

野上の里清水寺に登りて

雪をわけ岩根をよちて清水の  
みなもと深き流をそくむ

法華山一乘院にて

八のみね御法のはなのひもときて  
我衣手にかをりととめむ

月照寺の人丸祠にて

神のますところはここかかしこかと  
見れはうかへる淡路島山

また庭上の盲杖櫻を見て

しひし眼のひらきしままにさす杖は  
根もつきにけり花もさきけり



舞子の濱にて

しらふともしらて調るつま琴は

舞子の濱の松風の聲

須磨の浦に古を弔ひて

戦ひし須磨の昔の跡とへは

よせひく波の音はかりして

また敦盛の死をしのひて

此君の青葉の笛の音はたえて

秋風寒し須磨のうら波

兵庫を過ぎをりふし雁をききて

しはらくは都うつせし津の國の

むこのうらはの初雁の聲

天王寺に詣て

むら雲の風にふかるる絶間より

さやかに見ゆるいさよひの月

和州竹田庄細流の中に古碑あり孝女伊末かしのしなりと聞きて

いにしへのおやにつかへし人の名を

今につたへてくむなかれかな

三輪明神を拜みまつりて

三輪の山ふしてをかむもいにしへを  
思ふはかりの手むけなりけり

南都雲降坂にて

雲おりの坂のふもとにきく雨は  
みとりの池にたつけふりなり

菟道の勝をさくりて

なく鹿の聲をしるへにこの秋は  
世をうち山の昔たつねん

唐崎にて

千代を経てみさを、見するから崎の  
松の色そふむらしくれかな

江州坂本のやとりにて

琵琶のうみ四のしらへの音するは  
濱のあらしのかきならすなり

七社に詣で、

けふの日はいかなる日かもひえの山  
ふたつたになき法の道とふ



また

ふしをかむ心のほかに法もなし  
法の外にも心なければ

泊船菴にて

いにしへのなかれをくむも法の水  
思へはふかきえにこそありけれ

白木鶴亭の別墅にて

打日さすみやこの秋の夕くれは  
さひしとのみもいはれさりけり

おなし

をりくは雲のたえまが出る月  
人の心にさも似たるかな

南勢高源和尚と太秦の里を過くるとき

太秦のもりに轉るうくひすは  
たとき御經をまねふなるへし

逢坂の關より湖上を望みて

ひらのねに残るゆきかな春も今  
なかはは花となりぬるものを

たはむれにゑかける繪の上に題して

かれは西これに東へ歸るへし  
杖と笠とは富士見西行

青野ヶ原をよきりて

消のこる谷の白雪瀧に似て  
なみかときけは松風のおと

白石村にて

吹よせの雪にはあらて白石の  
かたき心を村の名とせり

はなをかや露ふけし野にきてみれば  
ころものすそはしほたれにけり

奈良の都にて

茶のはなも咲そめにけり露しもに  
奈良のやまゝ紅葉するころ

大きなすつぽんを人のもてきて放生するに回向してよとのそむに

法のこゑさつけてわれをはなつなり  
うまれかはりてきけ法の道



道純か身まかりけるとき

うまるゝも死ぬるも外のひとならし  
いつくよりきていつくへかゆく

また

こそ春のわかれに又とちきりしは  
けふきけとてか山ほととぎす

また

山さくらきのふのかせにちりはてゝ  
けふはみとりにそめかへてけり

— 大用國師(誠拙和尚)歌集終 —



浪花のつと

今 北 洪 川

十五日新みなとの沖にて

すみやかに風ふき送れたらちねの  
母のおもかけとく見てしかな

十六日いつくしまの宮居に詣て

千早振神のみまへのわたつみは  
なかめも清きかゝみなりけり

その夜月好ければ

廣まへのなきたる海に照る月は  
神のこゝろをうつすなりけり

十七日同じ處にて鶯をきゝて或人の乞におくる

島やまもはや葉さくらに成にけり  
春の名残を告るうくひす

同じ處にて

且見れとあかぬいろかな海つらに  
浅みとりせし嚴しま山



十八日の曉音戸の泊りにて

とる梶のおとにうき寢の夢さめて  
空もこころもおほろなりけり

同じ日朝の泊りまで風よくて船はしりければ

行ふねは三はら竹原とく過て  
ほてうちよほふ朝の追かせ

十九日さぬきの灘にてかもめの遊ふを見て

おもしろくあそふかもめは春かせに  
浪のはなをや愛するなるらん

青うみに群つつ遊ふ夕かもめ

浪のひかりと見ゆるしらはね

小富士を見て

なかめてもさやかにみへぬ讚岐かた

ふしの高根は霞こめたり

鯛あみを見て

さくら鯛網ひく聲も春風に  
みとれて千々に聞えけるかな

廿日象頭山に登りて

限りあるいのちもなとか惜しからん  
きさのみやまの神のめくみに  
遠近の人や歩みをはこふらん  
すかかさつゝく神のみやま路

廿一日風なきて船ゆかす

船のあしものとかに歩む春の海  
ゆくとも見えぬ潮路なりけり

風なきて漕ゆく船もしつけくて

ゆくともしらぬ春の日なかさ

廿二日さぬきのせしまてふ處にて島守に清水を請て

島もりか墻ねの若葉しけりあひて  
しみつ流るゝ宿のゆかしさ

同じ處にたゆたふて

島々のわか葉の色は夕なきに  
うみの底にそみとりしにける



廿三日の朝

さゝ波もなくして長閑にこく船の  
ゆくあとみゆる朝なきの海

ひる頃より風出て船ゆく

笥の窓なかめはいとゝおもしろし  
かわるゝくに見ゆる遠山

牛窓の沖にて四國の山々を見て

明なんとする四つづくにのやまゝく  
あらそひたてる春霞かな

播摩なたにて未の時より風いたくおこりければ

つくゝとおもへはくるし波枕  
うき世の中のなかめせしまに

人の世にたくふおもひの梶まくら  
いつかあやうきうき寝さめなん

この夜はりまのいつ島に泊りて

ふけわたるまゝに浪間の漁火も  
千々にわかれて淋しかりけり

廿四日曉いつ島を出て

藻しほやくけむり赤穂の遠干かた  
ともにかすめる備路の山々

はりま灘あたりにてよめる

はりま路の浦に鹽やく煙こそ  
かすみの立てるはしめなりけれ

高砂の沖にて

余處に見て走る帆船や播磨かた  
むかし忍はる高砂のまつ

磯遠くまつの村立見ゆるかな

おのへ高砂そねへふの浦

明石の浦邊にて

ほのくとうらもあかしの松風は  
ことのはうたふ調へならまし

そこらわたりにて

播磨なたしほ路をからく凌かな  
八とせわかれしはゝを見むとて



世のはりを遠きしほ路の筈のまとに  
さきちる浪の花を見るかな

いかはかりうき業ならむ船人は  
眼に見えぬ風そいのちなりける

わたつみにいくへ重なるしら浪は  
ここにわか呑む茶の湯なりけり

浪花のうら邊にて

みなれにしむかしをしのふ浪花江の  
浦なつかしき淡路しま山

たまさかにのほる難波のうらにきく  
浪の音さへうれしかりけり

廿五日母のもとに到りて夜はなしして

千さとへてまた逢見むもかたはてふ  
浪花のあしの一と夜はなしに



なかからぬ世にうへもなきおもひては

八十八ツの母みてしけふかな

婆々和々をみるにつけてもめてたけれ

これそまことの佛なるらん

母公の八十八を祝し奉りて

千代のやま攀らん八十の八つの君

今そよもゝの畑こへをして

八十八つのよはひ嬉しくあや衣

舞つゝのほるひなの長路を

ことし母公の八十八つの賀を嬉ひて一首よみ初しより

敷しまの道を嗜むとて

たら乳根の越なん千代の山路より

わかことの葉は生ひそめにけり

この夜母の佛すこやかなるを見て心降りよく寝入ぬ

夜ふけ目覺めて

法のため親の爲てふ故ともなく

はちろふ五十のわかおもかけを

(虚舟記す)



應無所住而生其心

我かけを寫すは水のころとも  
しらて雲井をわたるかりかね

田邊好賢ほうき竹にてもものしたる花器を愛して銘せよ  
とある予嵯峨やまに在し時桂宮の御好とて大井の筏の  
棹もてものせし花器水馴棹と御銘あるを見侍りし事を  
思ひ出せしまゝすくに其の御銘をとりて水馴棹となん  
銘し侍る題に

大井川はや瀬を下る筏師も  
はなにはとゝむこの水なれ棹

梅雨

山のうちと木々のみとりに鎖込て  
とふ人たにもなか雨の空

忍之爲徳持戒苦行不可及といふことを詠みて香川一  
枝居士の京師に役しけるを餞して

きゝしよりたへなるものは世の中の  
しのふのやまのけしきなりけり

佐甲智鑑大姉の乞玉ふに詠みて與へ侍る

法の身の清き姿は千代かけて  
うつるかゝみのかけはかはらし



同壽妍大姉の乞玉ふによみて與へ侍る

やま人の愛る御のりの花のいろは  
千萬津までも榮えぬるかな

道

人はよしあしといふとも難波江の  
みをつくしてそ立る道なる

明治乙酉の秋の日詠み侍る

たらぬ世にことたる身こそおかしけれ  
梅もありけり水いしもあり

盛開の櫻花うつろふを見て感あり

咲くも夢香ふもゆめの浮世とて  
ちるやさくらのこゝろなるらむ

禪學熱心のひとにおくる

おもひ入るこゝろの山のおくにこそ  
都にまさるはなもありけれ

天に口なし人をして云しむ

されは天にくちなし色の福壽草  
開ひて人にははると謂しむ



山居

雲とたゞふたり住居の槇の戸を  
わか友かほに明る松風

——浪花のつと終——

楞伽窟歌集

釋 宗 演

心よりやがてこころに傳ふれば  
さく花となり鳴く鳥となる

鶯もいまだねふりてあしびきの  
山しづかなる春のあけほの

世をすてし身にも旅路はおもしろし  
舟も車もわが庵にして

わが庵は膝を入るるにあまりあり  
いざ宿かさむ峰のしら雲

其奥のなほそのおくにひそめるは  
果しなき世のおのが姿か

歸り來て見んと思ひしわが庵の  
庭のさくらは散り果にけり

咲くも夢にほふも夢の世の中を  
ちるや櫻のまことなるらむ

天地は夜のころもつつまれて  
ただ一聲のやまほととぎす



足引の山の秋風夜ただふけば  
雲にかりねの夢ぞさめにける

わがやどの夕顔棚のかぜすずし  
暫しとどまれ憂へある子よ

路の邊に捨てし花の枝拾ひゆきて  
山寺さんじの僧そうに與へんと思ふ

目の前に大海の水はみちてあれど  
救ふにかたし星ほどの火を

我も人も皆火の宅いへに住みながら  
焼けずば知らじ空蟬の世を

はなに泣き月になげかふわが戀は  
大だい天てんつちの謎のひとつか

谷の流むすびあげつつなほぞ思ふ  
吾手にあるは月か水かと

病みてあれば日の暮おそき山寺に  
碧巖をよむ雨いまだやまらず

ことごとと槇の戸たたく夜半の風  
入りて語らむ秋の長夜を

山住の身は白雲を友として  
夜半の夢路もきよくぞありける

春の晨溪にのぞみて面あらふ  
水にも花の香はのこりけり

石ほとけ身を道のべの雨風に  
まかせはててぞ安けかりける



僧老いて落葉はらはぬやま寺の  
柿のほつ枝にひえ鳥の鳴く

みじか夜にかまくら山の雨ききて  
いく百年の夢をみしかな

旅にいねてよなよな聞きし雨の聲は  
わが山里の泉なりしか

時しあれば風吹かなくに梅の實の  
苔路におつる二つ三つ四つ

くらきよりくらきにたどる迷ひ路を  
照らす螢の光ともしも

もみぢ葉はちれど尊とし奥山の  
苔路に敷ける錦とおもへば

入あひの鐘のひびきに木葉ちりて  
わが山寺に冬ぞ來にける

よもすがら秋をあはれと鳴く虫の  
悲しき聲を誰かきくらむ

村はづれ杖をとどめてこととへば  
人なき家に庭鳥のなく

ものごとくに心やどさぬものぞなき

山もほほゑみ谷も物いふ

人のため世のためつくる罪ならば

我は厭はじ地獄の火をも

ひさかたの空に浮べる白雲は

木の下かげの水にぞありける



花はとく庭の梢ににほひけり  
野邊にたづねて歸り來つれば

白雲はふもとの路をさへぎりて  
嶺の木かげに馬たかく見ゆ

山や水や皆わがものに慣れなれて  
時鳥さへ聞きもらしけり

さえわたる光は空にあふるれど  
影まばらなる木がくれの月

年おいて杖にひかるる人みれば  
幾世へだてし父かとぞ思ふ

山人のねふりを守る墻の花  
汝が夢よいかにあらしふく夜を



こころある人に聞かせむ山寺の  
木葉をたたたくむらさめの音

梁となり棟木となるもあしからじ  
薪となりてわれは果てなむ

わが身には昨日もあらず今日もあらず  
たゞ法の爲つくすなりけり

山を出でて山にさまよふ浮雲の

しばし宿かる富士の岩がね

木のもとを浅く流るる小川にも

水かわかねば魚はすみけり

歌がたり語りかはしてふかす夜は  
寒き心もはるめきにけり



あまつ神修羅の巷をきよめむと  
にほはしませる初日かげかも  
うら嫩くもえいでん木も魔の臂の  
寒き霜にぞごえてありける  
わが心冬の枯野にさも似たり  
あたたかき日の影をおひつつ

身と心名こそかはれど世の中は  
皆いたづきの人にあらずや  
梅一枝軒端の春を手折り来て  
またひとえだを友にわかちぬ  
山寺の春のたのしさうぐひすは  
窓にぞうたふあした夕べに

天の下に法師の身こそたのしけれ  
雲を褥に山をまくらに

生もゆめ死も夢ゆめもやがてゆめ  
たゞ一枝の花をながめて

故郷のありてなき身はいづこにも  
逢ふ人々をはらからと見つ

世のめではありもあらずも常盤木の  
此山中に安くありふる

失ひし寶たづぬるおろかさ  
外にはあらで我が身にぞ知る

浪になれ岩にくだくる月影は  
世を思ふ身のころなりけり



とひ來つる人を嬉しみしるべして  
うしろの山の梅の花見る

夢の世にゆめの此身のしばしありて  
み法をぞ説く天地の爲

庭に立ちてたたくき臂たちし祖師もあるに  
病みたる我はいねて雪みる

病める日ぞ惜まれにけるかかる身の  
何一つだに功なければ

肉もさけ骨も凍りしいたづきの  
消えて痕なしあわゆきの如

雪と匂ふ梅の木間ゆ夜はあけて  
山のどかなるにはとりの聲

ちはやぶる神の心をさながらに  
けがれにそまぬ富士の白雪  
美しきさうびの花の造り花  
かをりなきはたあはれなりけり  
かへりみる父母あらぬ身なれども  
家路こひしな時鳥きけば

いつとなく春の日かげは暮れゆけど  
なほ光あり花の一もと  
雨晴れて雲もあとなき大空を  
ひとりしめたる夜半の月かな  
道のべの名も知られざる草の花  
往來ゆきの人にふまれつつ咲きぬ



この草にこの花にしもあきの色  
あきのかをりを誰かあたへし  
こまいぬのそびらに花のちりちりて  
行くはるつぐる老の鶯  
山深み時におくれしうぐひすの  
聲をぞめづるただ一人して

ちる花を手にうけて池の岸にたてば  
池のうちにも我は在けり  
柴の戸をたち出でてみれば曙の  
庭にこぼるる萩のうへの露  
墨染の袖にちりくるさくらばな  
塵まじるとて拂ふべしやは

春がすみくれゆく方を眺むれば  
花の雨こそふりみだれけれ

のどかなる心の海も時ありて  
つぶてをうてばさざ浪ぞたつ

夜のほどに聞きつる神のささやきは  
此の瀧つ瀬の響なりけり

旅に暮れてゆくらむ方もおもほえず  
路を埋むる花の吹雪に

山の端に花とみえしは霞にて  
風ふかぬ間にきえうせにけり

ちりにそまぬとほ山の端のしら雪は  
神の心の光とし見ゆ



そらごとともまことも風の便ぞと  
天つ御國にゑみてきくらむ  
夢に入りまた夢を出てある時は  
涙ながしつほほゑみもする  
聞く人のありやなしやをよそにして  
深山の鳥の美しくなく

いにしへの聖の心おもひをれば  
竹のとほそはただ雨の音  
玉琴のしらべかなづる岩清水  
音ぞ澄まさるふけゆくままに  
ま夜中は松風とこそなりにけれ  
竹につもりしたそがれの雪

いたづきの魔さへ慣るれば道の友ぞ  
いざ書よまむ心ゆくまで

夢に入りてただ一聲ぞ残りける

雲のいづちの山ほととぎす

花見むとあかつきかたに來て見れば

木間の鳥の聲ののどけさ

ここに住みし時しも植し若き木の

高くなりぬるに驚かれける

つくづくと吾御佛をおもふかな

花の木蔭にたちとまりつつ

咲きそめし花はあはれのはじめぞと

知らで眺むる山櫻かな



世の人を救ふとはいはじ御教を  
説くは吾身の學ぶなりけり

よしあしのうき世はなれて浪にあそぶ

鷗の心我はまなばむ

堪へがたし暑しやといひつ今日もまた  
心のゆるび口にもれにけり

むらさめはわが夢の間に晴ゆきて

夕日ぞにほふ樹々の雫に

いく世へて朽ちぬ心のほの見えぬ

雪間ににほふ老梅のはな

わがむねにたえて偽あらざらば

楽しくぞあらむ人の此世は

天地をわが世と思ふ吾胸は  
をさなごころのなほしやどるか

ここもまたうき世なりけり松が岡  
降る梅雨に訪ふ人もあり

とほやまの雪にもはるの光みえて  
軒の老梅かつがつさきぬ

水の面によなよな月はかよへども  
心もとめずあとも残さず

とほく行く友を送ればすみぞめの  
わが袂にも秋はしみけり

にはとりの鳴く聲ちかし夕日さす  
山のあなたは友のすむ村



梅の實の落つるを見てもかこちけり  
雨の咎にはあらじと知りつつ

からうたを高らかに誦して興ずれば  
小池の蛙聲を合する

夏草の繁らむままにまかせおきて  
露も宿さん虫もきかまし

峰いかり電ひかり雷ほえて  
あとしづかなるなつの雲かな

みねの松谷間のかけひ鳥の聲  
など世の人はよそに見るらむ(山寺)

住む人のこころも清きやま寺の

庭の櫻はいろまさりけり(ある寺に詣でて)

消え失せしよべの吾夢よびかへし  
飽くまでめづる耶馬の溪山

わが心きよめてしがな五十鈴川  
よろづ代かけてすめる流に

老人をやしなふ泉くみて思ふ

わがたらちねのましし昔を(養老)

から倭その言の葉はかはれども

かはらぬものは誠なりけり(朝鮮)

明らけき鏡と澄める海のおもに

雲ちぎれ落つ高麗のしま山

人の子の骨もて積める爾靈山

わがふむ土は誰がかばねぞも(旅順)



落葉朽葉はらふひとなき北陵の

折れたる松に鳥が音ぞする(滿洲)

旅にやみてむかしの人の心おもふ

わが夢はめぐる長春の原

呼びとめて問はむとすれば夢なりき

滿洲の野に立てる旅僧

海しづかにあゆまぬ如き船脚の

さきより動く瀬戸の島やま(瀬戸内海)

みる毎にいつも景色の新らしく

見ゆるはめづる心がらかも

冬となりまた夏となりていくたびか

衣がへしつたかさごの春(臺灣)

教なき人のあはれさ首かきとり

手柄と思ふ人のいとしさ(生蕃)

老たるも若きもおのが年知らず

繩を結びて日をかぞふてふ

千里萬里しろを築きて何かせむ

人のこころに關はあらぬを(萬里長城)

四百餘洲ひとまろがせの光にて

ところへだつる山川もなし(北京觀月)

北南なにを争ふおほぞらの

月のひかりはへだてぬものを

ふるさとは千里のをちの音づれを

もたらしもせて過ぐる雁かも(洛陽)



古寺に秋をやどりてここのとせ

ここに過しし人をしぞ思ふ(嵩山少林寺)

天の下小さしとみし人よりも

おもかけ高し文かかぬ石(泰山頂  
無字碑)

大后雲のあなたに消えし世を

知らでや遊ぶ池の水禽(萬壽山御苑)

三千里ゆるく流るる長江を

いざのみほさむ吾のどかわく(揚子江)

國びとのこころうつすか大き江の

流ゆるくして水にごりたり

問はばやと思へば消えて跡むなし

金寶山の夕ばえの雲(南京)

秋晴れて夕日かがやく金山の

ふもとに立てる僧のけだかさ(鎮江)

寒山寺かねのひびきは今もなほ

詩のころを思はするかな(蘇州)

敷島の言葉の数は多かれど

此悲しびをいふよしのなき(明治天皇崩御)

千よろづの人の涙を海となすも

大御恵の露にもあたらじ

大君の神去りましし今日し知りぬ

雲井の上も宮居なりけり

いでましの塵をしづむる梅雨は

國つ御民の涙なるらし(昭憲皇太后を送り奉りて)



嫩葉青葉しげれる園に君いねぬ

やすらげき世の夢を眺めて(徳富淇水翁  
を悼みて)

君が手のうちより失せし寶子は

吾が懐の玉としぞ思ふ(人の幼子の  
うせけるに)

なき親の残しし園の花折りて

まつるころに神いますなり(ある人に)

空蟬のうき世の浅き夢さめし

おくつきの邊に梅さきにけり(展故人新墓)

鳴る耳の人に知られぬささやきは

天つみ神の言葉なるらし(耳なりすと  
いふ人に)

手をとりに行くべき道はただ一つ

千代よろづ代の妹と背の道(結婚をほぎて)

草しげき伊深の里にうゑし根は

花の園生に匂ひぬるかな(關山國師の徳を仰ぎて)

年々にいそしみ祭る子等の上に

のこすいさをは彌勝りつつ(佐々木弘綱先の生の年祭に)

ちりひぢのけがれ多かる今の世に

この小佛を見るが尊とさ(人の得度を祝ひて)

わが身をば何にたとへむ行く雲の

山ある里は家路なりけり



昭和十二年七月六日印刷  
昭和十二年七月十日發行

(非賣品)

編輯者 牛

山 榮 治  
東京市麹町區九段四丁目六番地

印刷者 鈴

木 芳 太 耶  
東京市四谷區本村町四番地

發行所 春

風 館  
東京市麹町區九段四丁目六番地



375  
575



終

